

## Nature Center



■平成5年環境省生き物ふれあいの里事業にて、自然保護思想の普及を図ることを目的に市域北部宝鉦山跡地を利用し建設。都留市直轄運営を行い、14、5haの広大な奥山地形・森林形態の中、森と野生動植物と人間が繋がるワークショップ・観察会・キャンプ活動・小中学校林間学校や校外学習の受入や県内外へ出張しての講演・ワークショップ・植生調査などを行っている。

## Center Comcept



■平成23年の東日本大震災をきっかけにコンセプトをワーキンググループにおいて再考。「人と自然が繋がり、里の自然を使った生活など昔の知恵や技術を受け継ぎ、今の技術を融合させ、自分自身の力で自然の持続可能な暮らしをつくらう」とし、森を舞台としたプログラムを展開している。なかでも獣害や森林・竹林再生・心の再生・暮らし再生など地域課題プログラムが得意

## Center Program



■実践プログラム例 Practice of program  
森さんぽ・森たんけん・森の中のあそびづくり 連動型アクティビティー 見立て、伐採、運搬、製材、薪割り、たき火  
水育（森と川・湖と海のつながり）  
ぶり縄クライミング、シャワークライミング、カヌー  
土とのつながり  
泥たんぼ、川遊び、ドラム缶風呂  
人とのつながり・動植物とのつながり  
暮らしキャンプ・生き物と森の知恵キャンプ  
誰かといつも見えないところでつながっているキャンプ



2018年からの取組\_社会福祉法人真正会開地保育園年長\_水育プログラム

## 自然体験への思い Think of the natural experience

- 規律心と規範心を形成する、ひとつの手段  
怒る大人は増えたが、叱る大人は減り、無関心はさらに増えた。
- 子どもたちを知る契機  
本当ってなんだろうか？子どもたちは知らない。それは子どもたちは知る過程にいるからである。そこで大切になるのは真を追い求める大人と大人の価値観である。その大人から本当のことをしり、それをベースに様々な本当を構築し、嘘やごまかしを覚え、省き、生きていく糧を育てていく。
- あそびから生まれる子どもたちのルールを失う  
大人のルールに当てはめる大人が増え、それが社会のルール  
幼少期のあそびに大人たちの監視の目が増えすぎた
- 子どもたちを決めつけはじめた  
こうだから・・・ああだから。。。 子どもはいつも変わらない。  
変化したのは、時代とその時代を構築した大人  
子どもたちを研究しなくなった

## 連携前に現状の把握をこまめに

### ■現状把握 Current situation

都留市は市域にある保育園・幼稚園・小学校への自然体験活動のサポートを全面的に行っている。各機関の活動目的・取組内容・指導者の関わりやのスタンス・外部機関の活用形態は様々である。

### ■年間を通じての活動サポート

園・園長・保育士・幼稚園教諭・園児・保護者・地域状態ヒアリング

森や活動場所の診断・評価・総合評価・森の活用策検討（樹木調査・植生調査）

園・保育士・幼稚園教諭のねらい・思い・方向性・ゴール設定の把握

簡単な企画書の作成・プレゼンテーション

合意形成型会議・打合・ワークショップの展開

議事録の必要性と必然性と情報開示

⇒協同的・対話的なプログラムづくりへの移行と実践を第3者が介入することで、研修の一環となりうる

### ■行動社会化教育としてのサポート（単発受入）

実地踏査にて、活動のねらい、達成すべきゴール設定を共有

この受入の場合、森や自然界との距離が縁遠いことが多いので、参加者の自然に対する理解度を計り、距離感、間合い、理解度、ストレス具合をみながら、プログラムを展開している。

### ■取組みにおける社会的寄与（内的・外的効果）

⇒賛同者が増加する

⇒批難者が増える

⇒保護者説明会へよばれる

⇒入学・卒業式へよばれる

⇒単発受入が年間受け入れに変化する

⇒年間受入が発展的になる

⇒森での活動が増える

⇒家庭内環境がよくなる

⇒親子の会話が変化する

⇒大人の子どもへ視点が変わる

こどもの大人への思考が変わる

⇒自然（森・川・雨・動植物）が身近になる

⇒知恵をしぼるようになる

⇒毎日がわくわくする

⇒第3者に手紙を書くなど想いを伝えたいくなる

⇒体のバランスがよくなる

⇒集中力がつく

⇒規律と規範が身に付く などなど

### ■ゴール設定の重要性

都留市が行うプログラムは社会的寄与をねらっている。なぜなら行政としての使命だからである。20年培ったプログラムや手法、理念は全国または海外で磨かれてきた。実践を継続するからこそ、見えてくるものがある



子どもたちは、台風21号が通過し、7日経過した河川で何を学ぶのか

さて、私は何を学び・気づき・体感してもらうために、この河川でプログラムをおこなうのか？（2018\_0908\_都留市自然塾）

### 提案Ⅰ：社会の現状を把握する

：子どもたちのおかれている社会を凝視する

：凝視し、可視化する

：可視化し、直面する課題はなにか？

### ■社会情勢とそその変化

経済

政治

### ■大人たちの社会背景

教育

行政

養育

### ■子どもたちのあそびの変化

昭和20年～30年

昭和50年～60年

平成20年～30年

### ■大人たちの子どもをみる視点・思考の変化

### ■子どもたちの生きていく上で必要な自然体験

### ■子どもたちと関わる上で必要な自分のスキルと心

# 下学/デザイン感

## ■下学とは

物事を根本的に掘り下げて、考えていくことの意味

## ■デザイン感

単に建物や服飾・装飾によるデザインではなく、社会情勢・背景・経済・歴史変遷・背景・人・人の思考・自然界 いうならば、樹木の性格や動物の生態などを熟知し総合的に形作ることを指している

■デザイン感を高めるには以下による基本的な思考理論を把握し、日常的に実践を積み重ねることが必要で、幼少期からの自然体験や様々な体験を通じ、人間形成を繰り返し、成長することで培われる生涯教育である。学校教育は基礎であり、校外学習はその基礎を反復し、試作するところの応用である。その基礎と応用は密接に繋がってなくてはならない。

そのつながりのマネジメントを当施設では積極的に行っているが、利用率ならびに社会的寄与率は低迷していることで、社会的基盤が薄れていることは把握している。つながりというコトバは簡単に使えるが、そのつながりの継続性と信頼性と自己評価に関しては、まだまだ他人行儀なものである。それを放っておけば、また社会問題を子どもたちに押し付ける構図を生んでしまう。そのためにも指導者には協同的・対話的な学び手法の実践と自己評価を早急に取り組むべきであり、子どもたちに常に問いかけるべきである。

## ■テーマ

現状把握から導きだし、社会的に寄与することを念頭においている。

## ■やり方

手段(やり方)が先行せずに、プログラム評価、こども、保護者、指導者の評価を行っている。

## ■特徴

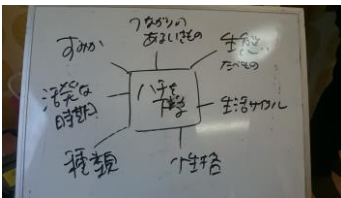
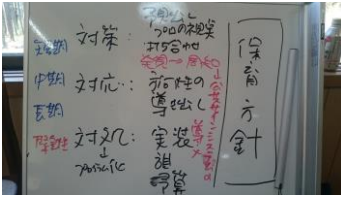
施設外へ出張し、体験・指導・評価・調査・研修を年間を通じ行っている。

## ■開発

団体の方針に合わせた自然体験プログラムならびに改変・整備計画を開発している。

## ■調査

森やフィールドを評価する調査を行い、1本1本1人1人の活かしかされる関係性プログラムを行っている。



## 大人の価値感磨き

～自然の中で子どもは育たない、多様な価値観を持つ大人とのふれあいの中で子どもは育つ、だから磨きをかけるのは大人な時代～

## ■研修の選択 Training of Choice

研修プログラムの構成は「協同的・対話的」「生物視点理解」「知る学ぶ欲の向上」「自分値・他人値」「大人は全てしらなくていい」「教えない・教えてもらう」となっている。全て社会情勢から汲み取ったもので、最終的に実践する大人の価値を磨いていくことにゴールを設定している。

生き物とのつきあい方 ～森と人のつながり方とその理解～

森にでかける準備 ～バックパックの中身と準備～

森の見立てと読み取り ～歴史・変遷・風の流れ・生物動向・樹木配置

森の図鑑づくり ～動物・植物リスト(協働型、指導者主体型)

森の活動スキルアップトレーニング ～自己評価・他者評価～

大人の価値観磨きワークショップ ～自分育てを下学する～

見守り保育と発達障害の自立プログラムを下学する

自然体験・野外保育への保護者理解を深めるワークショップ

～企画書の作り方、プレゼンテーションの起こし方～

～保護者理解をふかめるには～

～保護者からの問い合わせ・クレームをどうとらえるか?～

事故後のメディア、保護者、指導者、園児、児童対応～

■本研修プログラムは、社会生活全般に応じて作成をされている。

自然を理解することは他者を理解することにつながり、自然を知ることには自分を知ることにつながっています。

## 子どもと大人を同時に育てる挑戦！！

■ このことって、難しいかもしれないが、やってみないとわからない。やらないとだれもやらないで、子どもだけが路頭に迷う。しかし、迷う子どもは社会に出れずに、社会的に国民の義務を果たせなくなる。であるならば、だれがやるのか？一人ひとりの大人が役割を果たせばいいだけである。現状をキチンと把握・分析を行っている





こども 泥まみれになりたい  
 保護者 洗うの誰？風邪をひいたら？  
 こどもの無意識を育て、体験を経験にするの  
 はどちらのコトバであろうか？

## 命をつなぐとは

都留市のびのび自然塾の22年

### ■プログラムの再編（森のようちえんの子どもの育て方）

Am:地域リーダーを養成するためのプログラム

チームワークを高めるためのプログラム（他者受容も含む）

Pm:塾生たちがみずからあそびを生み出し、ルールをつくりはじめるプログラム（岩手県葛巻町森とかぜのがっこう）

### ■生きることの原則（wild and native Ws への参加）

I：食べない II：刃物が使え研げる III：水を作り出せる  
 iv：火を起こせる V：自然をいただく VI：聞く、訊く、聴く VII：体温維持

### ■ゲームソフト④レインコート（6,000円の攻防）

山梨豪雪時、塾生より1週間の家庭での動き、会話、食事内容、雪かきの仕方、買い物の内容をヒアリング

⇒ゲームソフト購入を1度休んで、体温維持をしてくれるレインコートを購入するプログラムを薦める。

⇒エネルギーを消費だけして、自助精神が全く育ってないことを深く反省し、生きることの原則、自分を守り、他者を助けるプログラムへ変更（現在も継続中）

## ■これから、さらに

2019年に森林環境譲与税が各市町村へ分配される。さらには2022年には県内に伐期を迎える樹木量がピークに達し、森林の活用はあそびだけでなく、利活用が本格化する。

幼少期からの行動社会化教育の一環として、林業という一次産業を目・耳・手・心で体験し、経験にしていくプログラムを準備中である。

幼少期・少年期・青年期・成人期と100年以上にかけて、海や川や湖の源である森を守り、活かすことのできる人間の心の形成と確かな技術の継承をしはじめます。森林経営ならびに森林作業は智慧の蓄積により達成されていきます。また、人の幸福感も智慧の蓄積にあるのではと考えています。またそれらの実践を通じ、明らかにし、その対価として豊かな水と川、海、森を残していくプログラムになっています。

